

コミュニケーションへの期待

1

社会革命の中でコミュニケーションはどのような位置を占めるか、というのがこの小文の主題である。しかし、それを直接語ることからではなく、私がかつて発表した文章に触れることから、次第に主題に迫ってゆきたいと思う。

「アナキズム」3号の「八石油危機V以後とアナキストの仕事」の末尾に、当面アナキストがなすべきこととして、私は次のように書いた。

徒党を作り、アナキストとしての党派的存在を誇示することではない。アナキズムというイデオロギーの信奉者を増やすより努力することでもない。アナキストを作ることが革命を成功させるのでは断じてない。(あらゆる特権を否定した筈のものが、自分は自分の思想を他者に強制する特権がある、と思いつ込んでいるとすれば、ナンセンスも甚しかろう)。そうではなく、自主的に判断し、主体的に行動できる人間を生み出すこと、それらの人々が協力し合えるよう助長すること、そうすることに

よって社会運営の実権を、できるだけ大衆自身の手中に収めるようにすること、が大事なのである。

したがって、大衆の組織の中に入ること、あるいは作り出すこと、その中で、大衆の一員として具体的な問題にかかわり、大衆とともにその解決に当たり、それを通じて大衆自身の社会管理を実現する方向で努力すべきである。そして、それらの大衆組織相互の連携をはかる場、経験を交流する場、協同する場を作り出す事である。そこに行動の第一歩がある。

この引用箇所について、私は今も訂正する必要は認めない。しかし、もう少し詳述する必要はあったのではないかと感じている。特に、アナキストの仕事は、「アナキズムというイデオロギーの信奉者を増やすより努力することでもない。アナキストを作ることが革命を成功させるのでは断じてない」という部分は、読者の誤解を招いたようだし、現に横倉辰次氏から私は、適切でない、とご注意を受けた。確かに舌足らずであって、真意を十分に伝えていない、と認めざるをえない。したがって、詳述する必要がある

江口 幹

ろりと思ひのだが、というのも、以上のような誤解を招くようないい方をした背景となつてゐる私の問題意識、前衛ないし前衛的党派と革命との関係についての問題意識が、十分に理解されるようには語られていないからである。更にいえば、日本の革命を目指す人々の間で、革命における革命家たちの反革命的要素、大衆に対してまず知的特権を主張し、主張しないまでも密かに自負し、やがては政治的、経済的特権をわがものとして革命を転覆させてしまふ、いわゆる革命家たちの反革命的な性格について、あまりにも反省がなされていない、と思われるからである。

2

二十世紀はさまざまな特徴を持つが、その一つは革命の世紀であるという事実だつた。しかし更にのべるなら、革命の変質の世紀だつた、というべきであらう。私たちは、革命が次々に裏切られてゆくを見た。そして、その裏切りの要因の少くとも一つは、革命家たちの労働にあつた。いかえれば、革命家たちは反革命家だつた、あるいは反革命家となつた。二十世紀の幾多の裏切りのうち、社会変革にたずさわろうとするなら、その点について、なぜそうだつたのか、十分な反省が不可欠である。しかし、その反省が満足しうる形で行われているとは、私には思われないのが悲しいかな現実である。

私たちは植谷雄高という優れた思想家を持つ。彼は、今世紀の諸革命の中に、革命党が階級化、固定化、保守化の温床になるといふ革命の変質を見、さしあつて革命運動の運動の内部こそ革命命されなくてはならない、と語りつづけている。彼が、反スタを

標榜するわが国の一党派を、その上からの革命方式、すなわち、「階級打破を唱えるところの階級保持、大衆の名を掲げるところの大衆蔑視、理論の重視を見せかけるところの理論軽視、を内容とする一つの支配の姿勢」の故に批判してからも、すでに十年余の歳月が流れている。しかし、革命運動内部の革命は行われ始めたとは思われず、彼の発言は一向に聞き入れられてはいない。革命的党派、革命家たちの集団のあり方について、徹底した討議が行われていないのも、その遺憾な証拠としてあげることができよう。残念なことに、前衛党の反革命性を指摘しつづけてきたアナキストの間ですら、革命的党派のあり方について今世紀の諸革命の経験を踏まえたと、明確な反省はまだなされていないのである。

しかし、ひとたび眼を外に、たとえば西欧に転じてみるなら、この反省は、革命運動内部での論議の今日における中心的なテーマの一つである。それは特に評議会社会主義者たちの中で盛んだが、前号の「評議会社会主義について」で触れたように、「革命組織の存在、役割、必要：：いかえれば、別の名称の下に再び現われる、党についてのあらゆる問題」が討論の的となつているのである。

そこでの問題意識は、要約すれば次のようになる。

1. 革命が変質された主要な原因の一つは、レーニン主義的な前衛党の主導下に革命が行われたからである。すなわち、労働者階級は自発的には社会主義的な意識に到達しないので、革命は歴史的進化について明確な意識を持つ人々からなる党の指導下に進められねばならない、とする党に、権力が集中したからである。

るべきだ、と考えている。

なぜ大衆組織自身によって進められるべきか、といえ、私は来るべき社会として、人間の人間による支配のない社会、少数の人間に決定権が集中しない社会を期待し、そうであるためには、それを目指す運動自体、来るべき社会を用意する組織自体が、少数の人間に決定権の集中しない組織である必要があると考えるからである。そういう組織として、少数者の支配を温存する外部からの指導を排した、組織成員の自由な発意と合意とに立脚する大衆組織を想定するからである。

そして、大衆組織自身によって進められるべきだ、という時、私は特に次の二点に留意する。

一つは、被抑圧者の解放は被抑圧者である大衆自身の成熟いかんにかかっている、ということである。成熟とは、現行社会の矛盾とその打開の方向についての自覚の深化、社会を自ら管理する能力と新しい倫理感の育成、自治管理の推進という形での社会管理権の奪取、を意味する。この成熟は、現行社会の矛盾との闘争それ自身の中で、つまり大衆自身の経験を通じてのみ、深められる。(ここで付け加えておけば、被抑圧者の解放の発展段階をいくつか仮定してみるなら、大衆が指導者、前衛党ないしその他の型の革命家集団を外部に必要とするのは、大衆の自立をもたらず成熟以前の、低い段階に属し、前衛の存在は遅れた時代を象徴する)

もう一つは、来るべき社会の制度と倫理のあり方を決めるのは、新しい社会を誕生させる大衆組織自身(新しい社会の成員自身)であって、あらかじめ新社会のあり方について図式を用意した、

何らかのイデオロギーではない、ということである。この確認は別に、革命以前における、新社会についての思想的首為の重要性を否定するものではない。そうした作業は、新社会を構成する成員たちが受け入れる限りで、大きな示唆として役立つに違いない。しかし、繰返すけれども、来るべき社会の制度と倫理のあり方を決めるのは、新しい社会を誕生させる大衆組織自身である。なぜなら、現実はいデオロギーがあらかじめ想定したよりも、つねに豊かであり複雑であり具体的であり、新しい社会の制度と倫理は、新社会建設を目指す大衆組織が、具体的な問題に逢着し解決してゆく、大衆組織自身の経験の中で決定されてゆく筈のものだ、と私は思うからである。

さて、そうした新社会を用意してゆく大衆組織として、私は「五月革命の考察」の中で、革命的サンジカリズム組織(労働者評議会、といつてもいい)、地域的大衆組織、自治管理企業の三つをあげ、自治管理企業について次のように述べた。

ユートピア運動と呼んでもよいもので、自発的な参加者の出資と労働によって運営される、農業、工場、金融機関、学校である。資本主義体制の中の競争にさらされる、資本が弱小であるという制約はあるが、一定の制約を除けば現行の支配のメカニズムから相対的に離脱した組織であり、ここでは、企業権力や行政権力の下にある革命的サンジカリズム組織や地域的大衆組織と違って、新しい人間のモラルと慣行の確立のために、未來社会の祖型としての実験が可能であり、生産、消費、経済計画、教育、司法、自衛などについて現実を通しての模索が行わ

れうるし、それによつて新社会を目指す他の革命的大衆組織への模範を示すことができる。自治管理企業の役割は、現行文明観の下にある既存の組織の中での革命組織形成と違つて、そうした制約を離れ、新しい文明観の下に新しい社会を形成する実

験という意味で、特に重要である。

さしあつて私は、コミュニンへの期待として、以上の言葉のほかに、何一つ付け加える必要を認めない。

キブツのこと パレスチナのこと

広河 隆 一

イスラエルから戻つて四年間過ぎ、この間に多くの論議が為された。パレスチナ問題に関しては何十冊もの本が翻訳、刊行され、その論調の激しさと対照的に、キブツを正面きつて取り上げることとの後めたさともいつた風調が育つた。それは、それまでのキブツ論がイスラエル讚美と同じ地平で為されていたこと、あるいは両者のゆ着といつた事情に助けられて、イスラエルの不正義が一つ一つ明らかにされるに伴い、キブツも非常に限定された大学の社会学教室の研究の対象としての狭い意味しか持ちえなくなつてしまつた。そこには、かつてキブツが持つていた熱情をかり立てるものはない。キブツが共同社会の理想をかなり満足させているという評価も、キブツがアラブの土地の収奪に眼をつぶり、その上に築かれ繁栄したという批判の前には色あせて見えた。キブ

ツに興味をひかれた同じ動機の故にイスラエルを批判できる運動は日本では育たなかつたし、反面、イスラエル政府も、イスラエルが築いた正義の神話に疑問符をつきつけた人間たちが、日本の世論の中でのイスラエルの最後の安全弁となることを理解するまでは、まだ政治的に成長してはいなかつたため、キブツ協会の人々の追い出し、そして協会の衰退という経過を招いたのである。しかしもともと権力や管理機構の分散という意味でキブツに魅力を感じた人々が、それがイスラエルという一つの国家と相容れる考へではないことに眼をつぶることはできなかつた筈である。国家の方は何が敵であるかを良く知つてゐる。イスラエルで国家が最も脅威を抱いてゐる思想家は誰かと、ウリ・デービス（イスラエルの若い行動的平和主義者。アラブの土地収奪反対の抗議行

動をアラブ人と共に起こし、イスラエルで最初の徴兵拒否者でもある。)に質問したことがあつたが、彼はすぐ、ブルードンの名をあげた。ウリにとって、同時にイスラエルにとって最も危険な思想は、ブルードンの視角からブーバーがキブツに与えた評価でもあつた筈だ。もちろん、この時にすでに、キブツは国家として恐ろしいものではなくなつていた。イスラエルはブーバーの「評価」を恐れたのである。不断の民族的「絶滅」の怖れを見事に自分たちの栄養源としていたイスラエル国家にとって、ブーバーの転向も時間の問題であつた。ウリは、「私はブーバーがいう非中央集権の社会主義の正しさを認める。しかし同時にブーバーの退却を明確に拒否する」と述べている。

正直いつて僕にはまだ「ブーバーの退却」の意味が分かつていない。シオニズムという巨大な疎外と排他機構を持つ一種の国家主義の中で沈黙していった多くの人々と同じく、最初の沈黙がそれに続く年月における完全な加担を意味するこの国のシステムに対して、ブーバーも樂觀視していたところがあつたのだらうか。実際に、ことを複雑にしている原因はいくつか考えられる。その一つは、シオニズムというものが、政治経済社会などに具体的な形をとるときと呼称として理解しやすくても、テルアビブという町のなんとかいう角のアパートに住んでいるイツハックの、その仕事場、記憶、食事、頭をよぎることなどをシオニズムという言葉で切り込むには、それら日常のことの方が大きすぎて、荷が重すぎるのである。権力の分化に希望を見ている人々にとつては、こつち逆の、個人的なことからの光の当て方を避けて通ることではできないし、同時にそれ故、シオニズムはなかなか手のふれら

れない処に居すわりつづける。それにシオニズムは、イスラエルのユダヤ人にとつては、救いの思想でもあつた。(もちろん実際はどうかには関係なく、彼らはそうと固く信じている。)

二

一つの存在は決して政治的にのみ存在しているのではない。政治的に批判されたことが、その存在の他の側面をも切り捨てるならそれは間違いだと思ふ。キブツは確かにシオニズムを、政治的にも経済的にも養分として育つてきた。シオニズムがなかつたら、これだけ大きな組織にはならなかつただらう。しかしシオニズムがなかつたら、女性の労働の問題や、賃金、管理の問題などが今のようになつてはいなかつたか。それは無関係だつただらう。今までのキブツ批判は、否定できない部分までも否定していた傾向があつた。

言葉を変えると、そのようなキブツが、自由や欲求や管理に対する様々な夢をもちながら、シオニズムにからめとられていったという由にこそ、我国での共同体の問題となり得たのである。それは、無菌培養的な共同体や、意識革命志向の共同体などに、パラボラの未来を視ることを不可能にしている。我国の共同体運動をしているグループのほとんどは(一、二の例外を除き)、我国のアジアに対する抑圧、支配などに驚くほど無頓着である。それは必然的に、日本の共同体運動が、管理機構への抵抗という意味を余り追求しないという結果を招いた。自由や管理が非常に個人的なサークルの中で求められるために、個人の解放が他人の解放を経ないで、即解放された世界に結びつく。それは同じく管理社会

であるアメリカの東洋思想への憧憬が、日本の若い人々に輸入されはするが、決してそれは、管理以上に抑圧や飢餓などの問題を持つアジアの国のそれらへの思想傾斜ではありえない。日本では、自らを管理することが与えられるなら餓えることなどかまわない、という発想が生まれるし、それは現在餓えている国では決して育たない発想である。先進国の管理社会では、物質的な富に幸福を見ることを拒否するが、餓えている社会ではそれはいかにもぜいたくな要求なのである。

このことは中東では皮肉な形で現われた。権力の分化や、直接民主制による小社会の自己管理方式を追求してきたキブツは、その発展の過程で、餓える人々を生み出し、彼らの難民収容所からの告発を受けることになる。このことを、イスラエルはもとよりキブツの人々でさえも理解できなかった（意図的に無視するのならまだ方策はあつたろうが）ことが悲劇を、イスラエルとパレスチナ・アラブの二つの側で拡大した。

キブツにそこまで要求することの方が、勝手にすぎるのかもかもしれない。国家と対置させる非集権化の理想など、どこか遠くの安全な場所で眺めているだけの批評家たちの身勝手だったのかもかもしれない。しかしそれでもキブツは、日常の機械的な台所仕事や育児に気も狂いそうになっている女たちや、試験に明けくれる子供たちや、太陽と土を相手にする肉体労働へのあこがれで身を焦がしているサラリーマンたちにとつての夢であり続けることは事実だ。人は自分の状況の要求するものしか要求できない。そしてそれら個人的な要求が、いつのまにかイスラエルの場合のように他者への疎外と抑圧を生み出す場合がある。そのことは我国で一つ

の単純でしかし非常に困難な内容を持つ考えを共同体運動の中に持ち込む。つまり一つの小理想社会が、いかに様々な要素を満足させていても、抑圧を生み育てる社会の構成要素となっている間は、価値が抱括される社会の方にかすめとられてしまうということになる。こうして、抑圧を他者の上に生み続ける管理国家の中では、理想社会の要素を自らの構成要素とする一つの抵抗体社会が、共同体に新しいイメージを与えた。三里塚は、我国でキブツ協会を通じて広がった「共同体」の沈黙に呼応して、共同体を再生させる。そして難民収容所もまた、新しい社会の構造を持つ抵抗体として、一九六八年頃から生きづく。もちろん収容所は権力をアラブ諸国家とイスラエルの上に見ており、それらへの攻撃を通じて、既成権力と闘ったのであり、非集権化のアイデアそのものとは関係ない。しかし収容所村落が力と内実を持つていく折も折、パレスチナに一つの新しい国家を生み出そうという動きが起こつた。

三

PLO（パレスチナ解放組織）からPFLP（パレスチナ人民解放戦線）に至るまで、それらが解放されたパレスチナに、決して厳密な意味での反国家を見ているわけではない以上、収容所村落の存在そのものと、パレスチナ国家とは対立するものではない。こういふ考えの進め方が、日本の市民権を持つ人間にとつて可能なことで、世界が国家の集合体の意味となつていゝ現在、国家を持たぬ苦痛がどれほどのものであるか、僕には計り知れない。管理社会に住む人間としては求たるべきパレスチナ国家の中で、現

在の状態をなつかしむ時代がいつか来るかもしれないなどと考
てしまふ。無国籍の自由を憧憬を込めて想い起こす時代が。パ
スチナは、激しい抑圧、弾圧と、同時に限らない可能性を持つ地
域である。

ガザとヨルダン河西岸に築かれるパレスチナ国家はPLOによ
って主導され、パレスチナ人の現在の欲求を適確につかんで進め
られていく。一方このユートピアによってやがて生産されるだろ
う疎外と抑圧をあらかじめ除去する構造を持つ社会をめざそうと
するPFLPに代表されるグループがある。PDFLP（パレス
チナ人民民主解放戦線）は微妙な立場に立つ。本当のユートピア
のために難民であり続けよということを主導者の傲慢であると思
えた彼らは、自分たちの見解がやがて確実に弾圧され懐柔される
ことが見込まれる「国家」の建設を支持せざるをえなくなる。ア
ラブ諸国の中のもう一つのアラブ国家、パレスチナ国の建設を。

この地に二つのユートピア神話が育った。一つは実際にユート
ピア書の一つに挙げられる「ユダヤ人国家」に始まるユダヤ人解
放と、そのユートピアが生み出していくグロテスクな疎外構造の
ドラマであり、もう一つは、間もなく生まれるであろうパレスチ
ナ国の物語である。ユダヤの物語の中には、疎外構造を除去しえ
たかもしれないキブツの腐敗の章がかくされていた。キブツはP
LPの語る解放されたパレスチナの中でも本来の意味を復権させ
ることはあるまい。そして一方のパレスチナ——。パレスチナ・
アラブといつても実は非常に多様なのだ。イスラエル建国以来、
イスラエルのマイノリティとして存在を続けるアラブ人たちは、
様々な権利の剝奪と引きかえに、イスラエル社会の下部を構成し、

イスラエルの戦車が通る道路、ファントムが飛びたつ滑走路が主
として彼らの手で作られる。極端なものになるとイスラエルの国
境警備兵としての任務につくドルーズ族がいる。次には占領下の
アラブ人たちがいる。経済的にイスラエルに認められ、人口的に
は追放されようとしている人々である。次にアラブ諸国を中心と
した地域の難民收容所に住む人々。さらにアラブ諸国の経済、政
治の中に入ってしまった人々。各層のパレスチナ人が少しずつ異つ
た期待を、解放されたパレスチナの上に置く。そしてユートピア
が、それを涸渇した状況の産物であり、それ以外の要件に関して
はしほれば残酷なものでありうる場合があるという事実を飲み込
んで、PLOとPDFLPによって進められるパレスチナ国家は
苦痛と後悔をはらみつつ生み出されていくにちがいない。

山鹿泰治・人とその生涯

エスベラントとアナキズム

向井 孝著 六〇〇円（送料共）

東京都板橋区赤塚二の三五の九

白樺ハウス一〇号 青蛾房

性とアナキズム

小川正夫評論集 六〇〇円（送料共）

名古屋市昭和区小坂町二の一六

小川正夫遺稿集刊行会

潮 流

10月~12月のメモ

活動メモ
機関誌・紙
新刊書籍

自主流通誌・紙

構成・戸駒恒世

活動メモ

- 10・12 第二回共同合宿 日本無政府主義者連盟準備会(東京)
- 10・13 反戦露天市 天王寺公園(大阪)
- 11・2 月例交流会(東京)
- 11・9 講演会、日本無政府共産党、その現代的意義をめぐって 相沢尚夫(大阪) 六十余名参加
- 11・17 第一回関東地区準備会議 日本無政府主義者連盟・関東地区準備会(東京)
- 11・17 岩佐作太郎に関するシンポジウム(東京)

- 11・27 石油パニック一周年講演 大門一樹 だらしね舎(大阪)
- 11・23 交流塾 日本人の源流をさぐる 野本三吉他(奈良市 交流の家)
- 12・1 月例交流会(東京)
- 12・6 プロレタリア詩を語る小集会 秋山清他(東京) 三十余名参加

機関誌・紙
自主流通誌・紙

- ▽非暴力直接行動 2号(姫路市亀山三五)
- 四 向井方 戦争抵抗者インタビュー(日本)
- ▽リベルテール 10月号(東京都練馬区大)

泉学園町二一九〇 萩原方 リベルテールの会)

▽リベロー 22号(京都市左京区田中門前町二八の五 リベロー社)

▽準備会ニュース 1号(日本無政府主義者連盟・関東準備会)

▽だらしねのはた 1号(大阪市旭区高殿郵便局留 だらしね舎) 0小特集・教育1伝習館全国集会の報告

▽準備会ニュース 3号(日本無政府主義者連盟 京都市東山区山科北花山六反田町二六の八 晴栄荘内 奥田恭司)

▽大道貫古今 5号(岩佐作太郎遺稿集刊行会)

▽黒旗の下に 3号(東京都文京区後楽二の七の五 啓衆ビル4F ランチヨ気付)

▽アナキズム概論 P・クロポトキン(宇都宮A 研資料集1)

▽組織 エンリコ・マラテスタ(宇都宮A 研資料集2 宇都宮中央郵便局私書箱九八号 星気付)

▽サルトン通信 171~2号(大阪市阿倍野区旭町一の一二の二 泉原文化内 向井孝)

▽日本無政府主義者連盟・規約草案及び綱

領草案によせて 石川玄造

▽長野共同体新聞 20号(長野中央郵便局

私書箱六二号)。障害者が安心して働ける工場を

▽非暴力 3号(千葉県市川市中山三の八

の三 古沢方 非暴力行動準備会)

▽百人委員会ニュース 3号(東京都文京

区本郷七の三の一 東大精神学科第一研究室気付 刑法改正・保安処分に対する百人委員会)

▽浦和市民新聞 16号(埼玉県浦和市岸町

四の二四の一五)

▽婦人運動の実践題目 高群逸枝(東京都

板橋区赤塚二の三五の九 白樺ハウス 一〇号 青蛾房)

▽らくがき 11号(堺市西野三九七 松美

荘八号)

▽英文リベロ 0号(神戸市 リベロ

・インターナショナル)

11月

▽非暴力直接行動 3号(戦争抵抗者イン

ター日本部)

▽リベロ 23号(京都リベロ社)

。精神医療の現場から(羽熊)

▽リベルテール 11月号(東京 リベルテ

ールの会)

▽パランカ 158号(秋田 パランカ社)

▽サルートン通信 173号(大阪 向井

孝)

▽黒の手帖 18号(東京都新宿区北山伏町

三三 大沢方 黒の手帖社)。労働と機械・大沢正道

▽自由大学ニュース 1号(連絡先・長野

市三輪五の二七の二〇二 春谷信一)

▽百人委員会ニュース 4号。10・26反

弾圧集会報告

▽月刊協同体 10・11月号(東京都渋谷区

代々木四の五の一四 参宮橋ハイッ

○ 日本協同体協会)

12月

▽リベロ 24号(京都 リベロ社)

▽リベルテール 12月号(東京)

▽非暴力直接行動 4号

▽大道貫古今 6・7号(東京 岩佐作

太郎遺稿集刊行会)

▽サルートン通信 174号

▽イオム 7号(神戸市葺合区熊内町一の

五の三 前田幸長方 イオムの会)

▽血乱死。権力に魅せられて(高橋)

▽アナキズム 5号

▽月刊協同体 12月号

▽長野共同体新聞 21号。部落解放闘争

と長野高教組(折井)

▽労働者渡世 1号(大阪市西成郵便局私

書箱31号)。資料・第一次釜ヶ崎暴動

▽らくがき 12号。靖国の歴史をみて

▽ほのお・炎 1号(東京 月例交流会の

ための紙)

新刊書籍

▽反体制エスペラント運動史 宮本正夫

(三省堂)

▽墓標なき革命家―大正の叛逆児高尾平兵

衛 萩原晋太郎(新泉社)

▽アナキスト―ロシア革命の先駆

勝田吉太郎(教養文庫・社会思想社)

▽中国アナキズムの影 玉川信明(三一書

房)

▽大杉栄書簡集 大杉栄研究会編(海燕書

房)

▽壺中の歌 Ⅰ わたしの群書群像 秋山

清 (仮面社)

× ×

▽非教条な精神 江口幹 早稲田文学10月

号

▽ピエロタ 総特集Ⅱ人間・大杉栄の思想

秋季号

▽絶対自由主義者の系譜 秋山清 流動11

月号

▽岡本潤日記 文芸11月号

△メモ▽プロレタリア詩を語る会

(東京)

秋山清編「アナキスト詩集」(海燕書房)

の発刊を機に プロレタリア詩を語る 集

会が七四年十二月六日夜、小石川後楽園に

て、二、三十名の参加者をえて海燕書房主

催で持たれました。

初めに秋山清、暮尾淳氏を中心として話

があり、その次に参加者からのいくつかの

興味ある質問、意見等が提出されました。

かつて出されている詩のアンソロジーと

しては比較的、内容密度の高いアンソジ

ィであるとの評価が提出されたり、更に突

き進んで日本のアナキストの詩の非インタ

紹介

「壺中の歌 わたしの群書群像」

秋山 清

著者は、「いつともなく書き溜まったも

の中から拾い出して、すこしばかり縁故

のありそうなものから並べる、といったや

り方でこのエッセイ集はできている」とい

う。Ⅰ本と人間、Ⅱ群書・群像 Ⅲ反権力

三代 Ⅳ旧刊文庫、の各章に分かれ、興味

Ⅰナショナルな性格についての批判なども

参加者から語られ、詩そのものの本質にま

で触れようとする間なども提出されたので

あり、単なる出版記念会以上の話し合いを

持つことが出来たと言えるでありましよう。

秋山氏によると、このアンソロジーの企

画は随分以前からあったもので、今度の出

版社の企画によって初めて日の目を見た

の事であり、この本の出た事を意義あるも

のとして読者に迎えられると考えられます。

あるエッセイにあふれている。

仮面社 一五〇〇円

『大杉栄書簡集』 大杉栄研究会編

大杉栄の同志にあてた書簡を、Ⅰ獄中消

息 Ⅱ近代思想と自由恋愛 Ⅲ労働運動へ

Ⅳ海外からの手紙、と年代順にまとめたも

のであり、飛鳥井雅道が解説「自由な魂の

パネ」を書いていいる。解説より一節、

……肝心なのは、大杉の心の動きのリズ

ムを確認することだ。その時々々の運動上の

細かい論争点を知ることがすべてではなく、

打ち倒されても前より豊かに力強くなって

立ちなおってくる彼の自己点検の力の秘密

を発見することこそが重要なのである。

彼は自分の皮をむきつづけた。意識して

それに努力しつづけた。そして、恋愛とい

う非条理的な局面でも、彼は多分に本能に導

かれてではあるが、社会的・肉体的制裁を

うけつつ、自分の皮をさらにむいていった。

その上にこそ、大杉の魅力が誕生したの

だった。 海燕書房 一五〇〇円